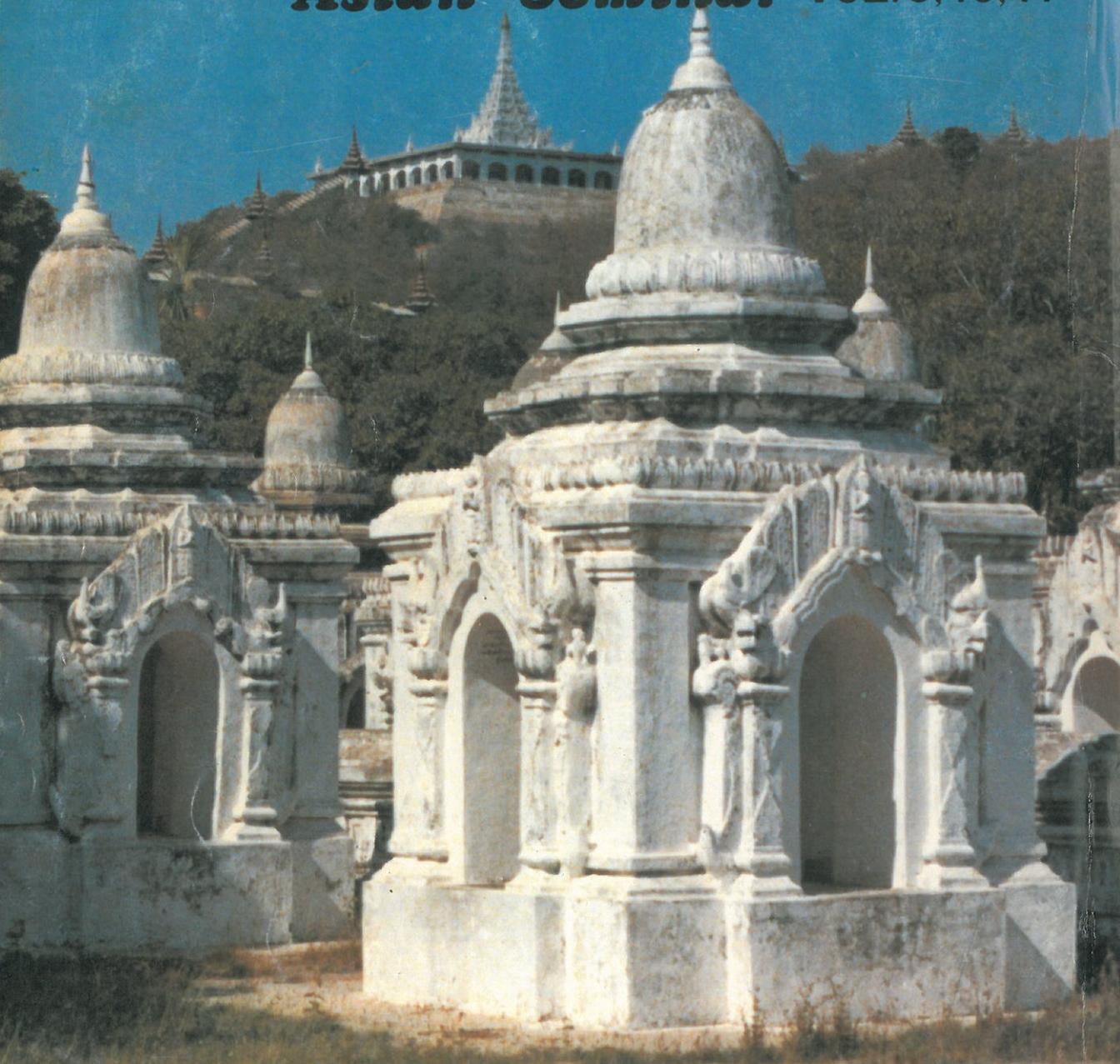


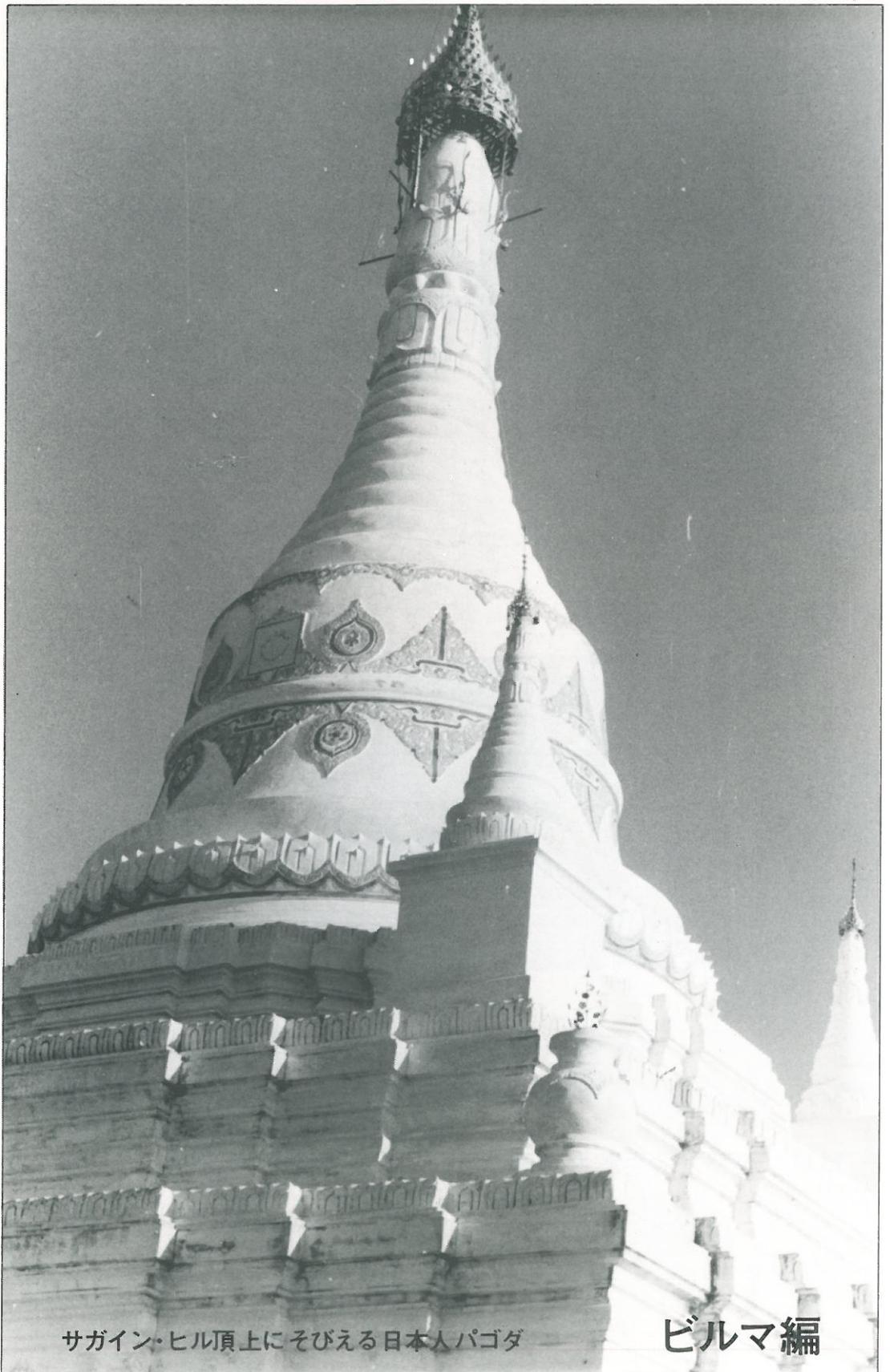
Solidarity

Asian Seminar VOL. 9, 10, 11



1857年ミンドン王によって造られた
クトドー。王室賜基金という意味で
第5回仏教大会で認証された仏教の
規範が729の大理石に刻まれている。

インド・イラン・ビルマ 編



サガイン・ヒル頂上にそびえる日本人パゴダ

ビルマ編

独特のヒューマニズムの国

隣人愛・相互扶助の精神が仏教と融和

荻 莊 則 幸

弘前大学医学部一年

昭和53年
12月16日
12月25日
ビル2紀行



喧騒と交通渋滞の街・バンコクの夜景を後に、ドン・ムアン空港を飛びたったUBA機は、小一時間程の距離にある、ラングーンへのミンガラードン空港へと向かった。

出発の前日のミーティングでは、いろいろと飛行機のおどかさされていただけに定刻通り出発すると聞いた時は安心して。無事にビルマへ行けるだろうと。やがて機は、全くの闇の中のミンガラードン空港に到着した。空港のテラスに多勢の人々がいてこちらに歓声をあげながら手を振っている。飛行機を降りてくる乗客の皆に手を振っているのだ。つい私も手を振ろうとしたが恥ずかしいのでやめてしまった。バンコクのドン・ムアンに降りた時、ああ南国の匂いがあると思ったが、やはりビルマも特有の匂いが

あった。バンコクのそれは、あとで、タイの料理にはなんにでも使用されているパクシーというパセリに似たものの匂いにそっくりだと思った。パクシーは旨いのだろうが、とうとう最後まで好きになれなかった。ビルマの匂いはバンコクのものとは違っていた。十二月とは言え、日本の八月なみの強烈な太陽の陽ざしのもとで、あらゆるものが腐蝕するのだろうか。それとも、この暑さの中で食事をするために必要不可欠なタイのパクシーのような香辛料のせいなのだろうか。おそらくそれらに加え、ビルマの人々がよく口にしてているビルマ独特の葉巻・セーボレーの香りなどが混沌としているためなのだろう。なんにしても、私には好ましい匂いであった。

最難関、税関へ

ターミナル内に入り、我々は入国のため最難関、税関へと向かった。大きな荷物は全部バンコクに置いてきてあるので、皆、身軽である。税関をうまく通り抜ける為の潤滑油として、メンバー一人一人に配給されていた百円ライターと、ボールペン、またリーダーがドン・ムアンの免税店で買ってきたウィスキーが効を奏し、時間はかかったが、めめ事もなく無事に通過できた。バンコクで何事も「袖の下」が幅をきかしているというが、ビルマでは国の玄関である空港の官吏からしてそうであるのには、いささかあきれた。ライター、ボールペンを手渡されると急に人の好い顔になりニコニコしだす。それまでは険しい表情を崩していなかったのに……。なんとなく腹だたしくて、手続きを眺めていると、隣りにビルマの人らしき親子連れが座わった。くりくりした目の子供にガムを渡すと、母親の方

を向いて受け取っていいものかどうか視線をなげかけている。強引に渡すと、なんとも形容し難い複雑な笑みを返してきた。母親も何度も礼をする。そうすると今まで腹だたしくしていた私も、なんとなくホッとした。また税関の脇の床でしわだらけの紙を必死にひきのぼしてたんでいたおじいさんに、税関吏ばかりがライターやボールペンをもらっているのだからと思ひ煙草とライターを渡すと、顔中に人なつこい笑みを浮かべ胸のポケットにしまいこんだ。片言の日本語を話し敬礼してきたのには戦後派の私には非常に複雑な思いも、また好感ももてた。税関を出て待合室を抜けタクシーの溜まり場に行く間に、次から次と年の頃十才前後の子供が煙草をくれと手を出してくるのには驚いた。彼らは私達が車に乗ってもしつこく手を出してくるのである。やつとの思いで車の荷台の部分に乗りこんだ。

排気ガスに閉口

車は空港を離れ一路ラングーンへと下って行く。しかし私ともう一人のメンバーは荷台に乗ったために逆流してくる排気ガスをホテルに着くまでたつぷりかがせられた。灯のない道を快調に飛ばして行くと、やがて四方のライトに照らされ夜空に燦然と輝く黄金の巨大なシュエダゴン・パゴダが見えた。この時、私は



一種の恐怖感さえ感じた。それほどこのバゴダは巨大で静かにそびえていたのである。街には、けばけばしいネオン、ビルがないだけにその黄金の巨大なバゴダは、あたかも闇の世界に生きづくもの全てを圧倒し支配しているかのように存在していたのである。このバゴダがビルマ国内のみならず世界中の仏教徒から崇敬されている由縁が分るような気がした。

シエダゴン・バゴダを過ぎて、やがて車は市内の威風堂々と構えるストランドホテルに着いた。ホテルの壁は戦前からの歴史を物語るかのように、くすんだ色をしていた。ロビーに一歩入ると、その薄暗い照明の中で高い天井からつるされた扇風機が大きな羽根をゆっくり回しているのを見てつい日本の銭湯を思い出した。しかしこれがクーラーより結構なところよい涼しさを感じさせてくれるのである。各部屋わりも決まり、二人ずつ同

室となる。荷物を持ち、長い薄暗い階段を登る。ここは三階かなと思ってもまだ二階であった。天井が高いのである。部屋に入ると、そこは二十畳もあるような大きな部屋であった。かろうじて日本製のクーラーがついており、動いてくれて助かった。もう排気ガスと砂埃で体中が汗くさいのである。バスはあるが汚れているので、シャワーの水を浴びずきりとした。その夜は遅く着いたのでホテルのレストランは閉まっており、リーダーの部屋でこれからの日程を検討する。ミーティングの後、バンコクで買い出しをしてきた干肉やソーセージなどを水と一緒に流しこみ、食事を終えた。

朝が早い現地人

夜、ベッドに入ると、大きな部屋のせいかわとも落ちつかない。また蚊の襲来とクーラーの大きな音で一晩中、熟睡できなかつた。おかげで朝食は一番にとりすがすがしい朝の散策を満喫できた。こちらの人の朝が早い事にはびっくりした。日中が暑いので一刻も早く朝の涼しい時に仕事をしようという訳なのだろう。また街並みは、ストランドホテルからして全くタイとは様相を異にして、西歐風なのである。過去のイギリスの統治時代に造られたと思われる建物がばかりである。ラングーンの歩んできた歴史の片鱗をのぞいた様な気がした。

この朝は、リーダー達は日本大使館に挨拶に行き、残った者はツーリスト・バーマへ交渉する者と連絡係としてホテルのロビーに待機する者とに分かれた。やがてリーダーより連絡が入り、ラングーンの外国語学校の学生と交流できるとの事で、皆で外語学院へ向かった。ホテルよりタクシーでおよそ十五分くらいラングーンの市街地を走ったが、バンコクではサムロという三輪のタクシーを初め日本製の車が所狭しとばかりに走り回っていたのに対し、ラングーンの通りは、車も少なく日本製の車はほとんど見うけられなかつた。駅の近くの映画館街では大勢の人が集まり、にぎわっていた。バン

コクでもそうだが、やはりこの国でも映画は娯楽として大きなウエイトを占めているようである。また街の中心部にそそりたつ黄金に輝くスレー・バゴダとその回りの西歐風建物の官公庁街との対



市の中心部にあるスレー・バゴダ

比に不思議な調和を感じた。

緑に囲まれた、こじんまりとした二階建ての外国語学院に車が着いた。ここでは英、独、仏、日など七、八カ国語の学科があり、一クラス五、六十人の学生がいるのである。ここで私達は、日本語学科の学生達と片言の日本語、英語でいろいろと話しをした。最初に私達が教室に入り自己紹介をしたのだが、どこまで理解してもらえたか不安である。その後、各自のところに五、六人ずつが集まり名前や住所を書き合った。話しを聞くと、彼らはラングーン大学出の人がほとんど、のエリート達で、会社に勤めていたり、歯科技師をしていたり、いろいろと職業を持っている人がたくさんいた。また年齢的にも十八才くらいから三十才くらいまでの人がいて多彩である。彼らは、ここで日本人講師より二年間日本語を学ぶそうだ。私達が訪れた日の次の日が試験だそうで、皆、力を試そうと積極的に話しかけてくる。教室には日本の風景の写真や新幹線の写真などが飾られており、日本に行ってみようと言う。知識欲が旺盛であり、向学心に燃えている様子は気持ちが良い。施設の貧困、教材・設備の不足などの悪条件に加え、かなりの暑さの中で皆よく頑張っていると思う。朝は四時頃に起き、一時間くらいお経をあげ、勉強して、それから学校へ行くそうである。彼らが将来のビルマを背負っていくとすれば、この国は日本以上

に人材に恵まれていると思う。それにもまして自分のビルマ語に対する関心のなさに、飽きれかえるとともに、相手に失礼ではなかったかと心配である。その後、正面玄関で記念写真を撮る。

同じアジアの人間として容姿などが似ている事、また、アジアで驚異的な経済発展を見た国として、彼らの興味はつきないようである。第二次大戦中に多数の日本兵が侵入してきて、ビルマで英・印軍と闘った、という過去の苦い事実があるにもかかわらず、ビルマの人々は皆、陽気で世話好きな人が多く、款待してくれ、悪いようにはしないし、決して不快な感情を与える事はしなかった。

その陽気な人々もバヤ(バゴダ)に参詣してお祈りする時は、熱心に真剣になるのである。一緒にバゴダを回っても、学生達は何かにとりつかれたかのようにお祈りしている。かなりの知識人でも、少しでも余裕があるとバゴダをつくり功德を積みたいという。

学生達が市内を案内してくれるとの事で、タクシーで総勢二十人くらいが市内見物に向かった。まず、下町の細い道をくぐって、ビルマ料理のレストランへ行つた。レストランといっても民家の玄関口の板場の広間に、座ブトンみたいなものを敷いて座わるのであった。しかし外見はともかく、出てくる料理はかなりうまくいった。次々と出される料理を深皿に盛られた御飯の上のせ、かきませながら

手で食事をする筆者



適当な分量を親指、人さし指、中指の三本指で食べるのである。これがなかなか難しいのである。親指で押し出すようにして口に入れるのだが、指をなめてはいけない、とか指を口に入れてはいけない、とか言われる。当然、左手は不浄な手なので使つてはいけない。彼らは年季の入った手つきで、感触を楽しむかのように、こねながら食べている。私の場合には指の間からはみ出る量が多いのである。あれも食べる、これも食べる、と、どんどん御飯の上のせてくれるのである。汗をふきふきなんとか食事を終えた。

次に私達は市内の美しいロイヤル湖に浮かぶ巨大な双頭の竜のような動物を形どつたレストランを見に行った。ここは最近つくられたらしく、セメントでできていた。ここより遠方に望める黄金のシユエダゴン・バゴダは、その抜けるような空の青さと、木々の緑と、湖の紺青色

とがあい重なる中で一きわキラキラと輝いており、この美しい光景は今だに脳裏より離れない。

また私達は、日本製の軽自動車の荷台に、幌をかぶせたタクシーに乗り込み、次の目的地であるワールドピース・バゴダへと向かった。このタクシーには運転手を含め八人乗るのである。幌がついているだけであるから風を切つて走り、とても涼しくて気持ちが良い。道路は舗装されていないわりには埃をまきあげないし、前を行くボンネットを上げたままで走るバスの後部のステツプにぶらさがりながら乗っている人達を見ているのも楽しかった。このバスには、後にマンダレーより帰つてきて一度、乗るチャンスを得たが、天井が低く、立つたままでは頭がつかえて乗りにくい。やはり後ろのステツプに立つている方が涼しくて楽なのだと分つた。ひどく混雑しているバスは人が片寄つて乗っているところちらの方に傾きながら走っているのである。

素足でバゴダ内

ワールドピース・バゴダで第六回世界仏教大会が開催されたとの事。私達は車の中にサンダルを脱ぎ素足でバゴダ内に入った。これから数多くのバゴダを回る訳だが、どこでもその入口より素足で入らねばならなかった。しかしこのバゴダも床の石は多くの人がお参りするため、

ぬるぬるしてあまり気持ちのよいものではなかった。入口で花を買ひ、中の仏像にさきげ、賽銭をあげ、見よう見まねで膝を折りお祈りをした。無事に日程を消化できますようにと。



ラングーン市内のバス

そろそろ夕闇が迫ってくる中を、ラングーン大学へと向かった。この大学は森の中に校舎があるのかと思うくらい緑が多い。東京の高層ビルの大学とは大違いだ。学生達が卒業式をやつたという、くすぶつた色の壁の講堂の前で皆で写真を撮る。彼らは写真に写るのがとても好きらしい。写真がビルマでは貴重なせいだろうか。

同行の学生に、講義はまじめに出席していたかと聞いたら、抜けだしてよく映画を観に行つていたと言う。日本の学生ならさしずめ、喫茶店、麻雀、パチンコとなるが、やはりどこでも似ているものだに妙に感心した。

すっかり闇に包まれたラングーンの街は非常に落ち着いた感じがする。夜とは、こんなに落ち着いたものなのかと新たに

認識できた訳である。人間は電気の発明以来、夜を恐ろしいものと感じる事が少なくなってきたのである。これが一番、自然に反した人間の傲慢さの顕われだと思ふ。夜の眞の闇に恐怖と不安、おののきもち、自分の非力さを知り、謙虚に一日を反省し、また来たるべき明日という日に力を貯える。文化が発達するに従つて、生に対する眞摯さというものがますます失われていく。そして自分達が造つた社会に自分達の生が脅かされるという皮肉な結果を生むのではないか。目的が見失なわれた状態で、社会が高度化していく。その中で個人は一層、孤独に昔まれていくのである。もう一度、我々は皆で近代化とは何かという事を根本に帰つて見直すべきではないかと思ふ。

生活と宗教が密着

ビルマでは少しでも経済的余裕があれば金箔を求め、それを寺院の仏像・パゴダに貼りつけ、その多くの人々の功德により黄金の仏像・パゴダが誕生するのである。それ程、生活と宗教(上座部仏教)が密着しているのである。文化が進み、使いきれない程の物に囲まれて生活している私達には、自分自身に対して守るべきような戒律というものがあまりにも失われてきているのではないか。物に恵まれた、よりよい生活を現実の生きているうちに求めている私達には、ビルマの人

々の生き方は理解し難い事が多いと思ふ。パゴダを作るのが賢明か原子力を作るのが賢明か私には分らない。しかしビルマの人々を積極性のない無気力な人々だとは思わない。日々、仏教の悟す五戒の教えを守ろうと努力し、僧や寺院に功德を施すことで来世において幸福になれると信じて、心穏やかに暮らしている。心を穏やかにする事こそ本当に人間の求めるべき事ではないかと思ふ。ビルマの人々は近代的な社会主義国家建設の道を歩みつつも、国民一人一人が功德を積みたいと考えるようになっていく。仏教の影響力のすごさには、甚だ驚きが大きかった。

曜日によってパゴダが異なる

そんな思いで、暗闇に輝くシユエダゴン・パゴダを訪れた。この有名なパゴダは高さが百メートルあまりもあり、円周も四五百メートルはあろうかというところもなく巨大なパゴダである。そしてその黄金の主塔の周囲には、同じく黄金の六十あまりの小パゴダがざらりとある。物売りがびっしりと並んでいる階段を登り、その基壇部に来ると、同行の学生に何曜日に生まれましたかと聞かれた。生まれた曜日によってお祈りをするパゴダが違うのである。日本に住んでいて、何曜日に生まれたかなどと気にも留めない生活を送っているだけに面喰ってしまった。こんな事でさえ、ビルマと日

本の仏教の違いがよく分ると思つた。仏教が初めて伝わつて以来日本は「大乘相應の地」とされてきて、ビルマの小乗仏教・上座部仏教を利己的な独善的な教えとして排斥してきた結果、大きくその教義、形態を異にしたのである。そして現代では、ほとんどの日本人が宗教を信じないで構うことなく生活している。ビルマに来るとそれは、あたかも悪い事のよりに思えてくる。しかし、自分以外の目に見えたもので自分を規制する事より、自分自身の内面から自分を規制する事の方がもっと難しい事だと思ふ。私は何かにすがつて生きていきたいと思ふ程、まだ複雑な人生経験をしていないからだろうか。

今日がお祭りだという訳でもないのに、このパゴダは数多くの人々が参詣に来ていて、なかなか賑やかであった。日本の観光地化した、成田山とか善光寺、京都のお寺をつい思ひだした。有名な寺院は多分にこういう要素を備えているのだろう。熱心な信者にとつては迷惑千万だと思ふが。

夜はホテルで会食。ビールとジュースで乾杯した。一日中つきそつて案内してくれた学生に加え、仕事を終えてきた外语学院の学生も来たのでかなりの大人数である。男子学生は結構ビールを飲む人がいた。男性は一生のうちで少くとも一回は得度式を受けて僧院に入りたいと願っている人が多いこの国では、在家信者

の戒として五戒が定められている。幼少の時期から人生においては戒律が非常に重要な位置を占めているのである。この戒律の中に飲酒戒があるので、ビールを飲んでも構わないのだろうかと思つてみた。しかし戒律とは人に迷惑をかけるために定められ、自分自身の精神をより高い安定したものへと導くものであるなら、一日を終え今日は戒律をいくつ守つたと振り返る、内省のための手段として考えれば良いのだらうと思つた。

因果応報の思想が

ビルマの人々が、この汚濁に満ちた現実の世界で上座部仏教の戒律を守り、精神統一を完成して苦を解脱しようとして生き、また、現世の諸現象を全て前世における善行、悪行の結果と考え、現在の現象の直接原因については考えないという因果応報の思想を持っているという事は私の人生に対する考えにとつて一つの材料となつた。この国の人々が、できるだけ功德を積んで、ひたすら来世の幸福を願ひ、現世はそのままで、なるべく安穩に暮らしたいと考えている事を理解する事なしに、合理主義、儲け主義の他の国々の企業がこれ幸いに進出しようとするれば、排斥される事は間違いないだろう。現在、欧米諸国を初め我国においても社会の高度化が進み、個人が一個の単なる歯車でしかない状態になってきており、

その反動として人は享楽を追い求めていく。戒律も何もない国で育った私達に課せられた問題は大きいと思う。日本では小学生、中学生の自殺が多いなどこの国の人に説明したらきつと理解できない事だろう。それ程、日本とは筋の通ってない矛盾した国なんだと思つたらとても淋しい気がした。

そんな事を考えた会食も終わり、学生達と別れ、明日のマンガレーへの旅が楽しいものであるようにと思いつつベッドへ入った。

次の日の朝は、五時にモーニングコールで起こされ眠たい目をこすりながらツーリスト・バーマのバスで空港へ向かった。これからビルマを離れる日まで付き添ってくれたガイドさんは日本語が達者な、三十才くらいの女性で、なにかと話し好きな人であった。公務員であるのに結構気さくで、お土産をかうお金をよく貸してくれた。別れる時に返すと、彼女が忘れていたのには参ってしまった。

空港で飛行機を待ちつつ食事をとっていた時、近くの席でアメリカ人らしき夫婦のガイドとしてついている自分の同僚である女性を指でさして、あの人はチン人ですとか、また別の所で会った同僚をさしてあの人はシャン人ですとか言うのである。我々日本人は同一民族が狭い島に住んでいて、そういう概念を持っていないだけに、不思議なものに思えた。考えてみると、単一民族だけで国家を形成し

ている国の方が地球上では稀なのだ。この国ではビルマ族を初め、カレン族、シヤン族、カチン族、チン族、モン族などの多くの少数民族が存在し、これらの諸民族が各々の族名を示す地域に居住するばかりでなく、歴史的にもビルマ族との闘争を重ねてきており、民族的、地域的な自治を要求し対立しているだけに、不安定な国内事情が続いてきたらしい。それだけに、このガイドさんの言葉には深い意味を感じた。

やがて、双発のプロペラ機で無事離陸した。飛行機の事について、入国前に右と左で回転数が違うなどと脅かされていただけに、この飛行機には政府高官が乗っていると聞いて、それでは大丈夫だろうと一安心した。

すぐに機は水平飛行に移った。高度はあまり高くない。眼下には赤茶けた大地が広がり、そこに点在する家々、田、畑



空から見たイラワジ川

など眺めてみると、どこかしら日本の田園風景と似ているような気がした。しかし、やがて蛇行の後をはっきりと見せるイラワジ河が目に入り、それまでの大地がうっそうたる南国の大ジャングルに変わり、どこまでも地平線のかなたまで、さえぎられる事なく続いている緑の絨毯に恐いような気がした。第二次大戦の末期に、何十万という人々がこの日本を遠く離れた異境のジャングルで戦い、敗れた事を思うと非常に厳粛な思いになってきた。イラワジ河やジャングルを見おろしながら、ビルマ人の気質がこの自然環境と密接な関わり合いを持って形成されてきたのだと思った。

民族の不幸を己の宿命に

三度に渡る英緬戦争、六十年に及ぶ英国の植民地主義支配、そして第二次大戦の三年間に渡る日本軍占領と、民族としての数多くの屈辱を受けてきたにもかかわらず、彼らは長い歴史の間に培われてきた寛大さ、忍耐強さを捨てはしなかつたのである。逆に、過去の民族の不幸を己の宿命としてさえ受けとっているのである。この、人の罪を許そうという寛大な包容力の顕れは、ビルマ化された仏教の世界観に基くものだと思うし、また同時に数百年の歴史を経てビルマの風土に溶け込んできた結果でもあると思う。この国民性を形成する気質に、やはりビルマ

の人々の住む自然の環境が大いに貢献しているのである。文明の礎となる、母なるイラワジ河畔に沿った高温多湿の肥沃な土地で、水資源に恵まれ、米を中心とした農作物の豊かな収穫により、生活にゆとりを持ち、そして、その恵まれた自然環境は人々をして偏見のない、包容力のある、寛大で、陽気で、自由奔放な気質を形成せしめる事になったと言われている。この下地があればこそ、仏教の平等、寛容、中庸の精神の教えを受け入れ、また博愛の精神をも身につける事になったのであろう。

また長いビルマの歴史においてビルマ人を支えてきた、いわば農耕文化は当然ビルマ人をして、土地に密着した農業経済の基盤をつくりあげ、それがおおむね村落を中心として発展してきたため、共同体の意識が早くから自覚め、社会生活の中心である家族という概念も我々が考えているより広範囲な集団を指すことになったのである。しかしここまでの段階には、日本においてさえも我々が考えている事である。そして共同体の意識が仏教の教理の導入と重なって家族内の絆を緊密にし、日本の社会にかつて存在した隣組制度のような隣人との連帯感を高め、大家族制度の発達を助長したと考えられる。したがって、農業を中心とした大家族制度のもとでは、さして職業に貴賤がなく、封建的な階級制度というものも存在しにくく、家族一同皆が等しく相和し、

隣人愛や相互扶助の精神が芽生え、仏教の教えと融和して、独特のヒューマニズムの精神が浸透するようになったのではないかと思う。ところが、こういう事が欧米諸国を中心とした近代物質文明が生んだ物の見方や考え方、すなわち貯蓄心、技術向上心、金銭に対する執着や衣食住をより良いものにしよとする欲望といったような経済的な物の見方や考え方に乏しいという原因になっている。そして現在でも政府指導者も含め、一般的にビルマ人は人間と人間との融和や愛情を一番大切なものと考え、物質的快楽はその次であるという、とかく我々が見すごしがちな、人間としての根本精神を大切にしている事は敬服に値すると思う。彼らは、この考え方に従って、余力さえあれば一つでも多くのバゴダを建立して功德を積みたいたい願っている。また、この精神は現ネ・ウィン政権の人の人による搾取の排除と社会主義経済を基盤とした理想社会の建設という大目標にも如実に顕われている。現在のビルマが社会主義共和国となつていてもそれは、ソ連、中国、東欧などの社会主義とは全く異なり、独自のビルマ式社会主義を推し進めてきている。日本では経済、技術の発展に伴い物質文明の向上にのみ熱意が注がれ、本来の人間の、内面的精神生活から疎遠になりつつある実情を考えると、ビルマを旅行する事で得られる実は大きい。

え、マンダレー上空にさしかかつて来ていた。マンダレー付近は緑の中に数多くの白いバゴダがあちらこちらに点在している。やはりビルマの古都である。やがて機は完全には舗装されていない滑走路に降りた。マンダレーはラングーンより比較的涼しく快適である。乾燥しているためである。ここはビルマ第二の都市で、ラングーンよりもしつとりと落ち着いた感じのする街であった。また昔からのビルマの精神生活、文化の中心地であるという。ラングーンはイギリス人のつくった街で、マンダレーはビルマ人の街である、と言われていたらしい。マンダレーの街を通り、マンダレー・パレスの堀と道を隔てて建っている清楚なマンダレー・ホテルへ向かう道を行っていても、ラングーンのようにふと欧州のどこかの街を走っているような錯覚を感じる事もない。やはりビルマ王朝の終焉の地らしく、その面影を王城やバゴダなどに残している。

小ざつぱりしたマンダレー・ホテル

マンダレー・ホテルは、ストランドホテルの様に威圧感を与えない小ざつぱりとした別荘の様なホテルである。私達はホテルに荷物を置き、日本製のツーリスト・バーマのマイクロバスで名所旧蹟を巡った。バスは笹でふいたような屋根を

持つ小屋の様な家がびっしりと建ち並ぶ細い道を埃をあげながら走る。その家の中には涼を求めて、のんびりとしている人の姿が見受けられる。また井戸でロンジーをまくりあげて頭から水をかぶっている人もいる。皆、何の仕事をしているのか不思議に思った。ビルマに来てから、そういうえば、あくせくと働いている人の姿を見た事がなかった。しかしバスがロンジーなどの布を織っている木造の薄暗い小屋の様な工場に着くと、そこには年の頃十二、三才以下の少女達が多くもくと機織りをしていたのである。一台の織機の前に三、四人が一列に並んで座って布を織っているのである。それが約二十台くらいあった。彼女達にカメラを向けると、一様にはにかむような微笑をおくってきた。東南アジアではどこでもそうだが、子供も立派な家計の担い手なのである。彼ら、彼女らも立派に外国



ロンジー工場の入口

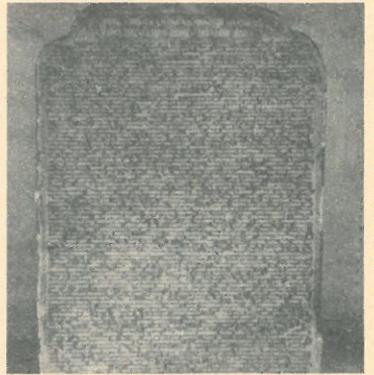
人からの外貨獲得に貢献しているのである。バンコクでは渋滞している車の間をぬうようにして、子供達が新聞、花、土産物などを売ったり、また車のウィンドーを洗剤で拭いたりして小銭をかせいでいた。子供の時から皆、身を粉にして働き、立派に生活をしているのである。日本の小・中学生が可哀相に思えてきた。勉強ばかりして生活とかけ離れた親の完全なる庇護のもとで育つから、少しでも壁にぶつかると、それを乗り越えられずに自殺してしまう。近代化された社会の皺よせが社会生活の弱い彼らに集まる結果なのだろうか。幸せとか貧しいとかいう事はどういう事なのだろうか。確かに物もない、ぎりぎりの線で生活する東南アジアの人々は、我々の眼には貧しそうには見えるが、そういう事には価値の尺度で計れない、もつと大きな要素があるように思えてしょうがない。近代的な教育は向上心を覚えさせる。しかしそのかわりに、相手をけおとす事も覚えさせてしまう。そんな先進国の教育は精神的貧しさを助長させる大きな原因である。物が豊富な生活をしていると、どうしても魂まで損つてしまう時が多い。やはり必要最小限の物資と食べ物、そういう中で生活してこそ、お互いの人の価値とか、人類愛を知る事ができるのではないかと思う。物を持つと、どうしてもそれに固執し、守ろうとするから角が立つのだから。難しい問題である。



がないという風である。パゴダもそうである。崩れかけたのがあちらこちらにあった。これもやはりビルマの人の気質なのか。我々としては、もったいないというか残念な気がしてならないのだが……。

幼い子供の僧が目

この僧院では、黄色の僧衣をまとった幼い子供達の姿が多く目についた。彼らは人なつこく一緒に写真を撮ったり、ずっと我々についてくるのである。そのうち何かお菓子やお金をくれと手を出すのである。ガイドさんが強くたしなめたので何もあげなかった。彼らは皆、遊びたい盛りなのに、得度式を終え仏門に入っているのである。仏の道よりもまだ好奇心が強い年頃なのである。ラングーンのシエタゴン・パゴダに参詣した時にもやはり、小さなお坊さん達が我々を見つけるとよく手を出してきた。私は思うのだが、これは最初に彼らに何かを与えた外国人がよくない。そのおかげで彼らは仏教の修行中なのに外国人に手を出せば何かもらえるという邪念が入ってしまったのだから。とは言え私も少なからず同情が湧き、ガムをあげてしまった。この安易な同情がよくないのである。彼らは大変な経費のかかる得度式をあげてもらったのだから、幸せの部類に入るのだろう。しっかりと勉強してもらいたい。そんな思いでシュエナンドー僧院に



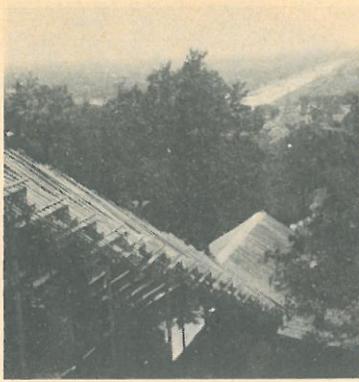
たのであろう。そう考えるとこの大理石に刻まれた文字一つにも王の願いがこめられているような気がする。

次に私達はマンダレーの市街地の北部にある高さ二六〇メートルのマンダレー・ヒルに登る。入口の左右に置かれたパゴダを守る怪物のような像はかなり大きく威厳がある。とにかく、このパゴダへ行っても寺院内に入る時は皆、素足なので、一七二九段ものセメントの階段を登るのはかなりしんどかった。ガイドさんは登り慣れているのであろう、息も切らさずにどんどん行ってしまう。喉が渴いたので途中の景色のよい茶店でやっと休んでもらう。ここで、おもしろいものを飲んだ。生のサトウキビを我々の目の前でナタで外皮をはぎ、大きな手で回す輪転機の様なしぼり機にそれを二度、三度と入れてしぼり汁を出すのである。このジュースは少し青みがかった色をしているが、甘さと生臭さがほどよく混ざりあつてなかなかうまかった。ここで働いているのも幼い少女達であった。一休みをしてまたきつい階段を登り出した。このパゴダでもそうであったが参詣する道の両側には、びっしりと物売りが居るのである。ここも階段の傍には、いろいろな南国の果物を山積みにして売っている子供や、象牙細工のお土産を売っている子供、またカメラをぶら下げた写真屋さんとかが居て商売をしている。人が集まるから店を開くのであろう。パゴダが

次に私達はシュエナンドー僧院に行く。ここは王宮が破壊される以前は金箔の貼られた豪華なものであったという。もとは王城の別館として建てられたもので、ミンドン王の死後、その跡を継いだティボー王がしばしば瞑想にふけるためにここを訪れたという。この僧院の周囲の壁面や柱、欄干には十九世紀ビルマの芸術であり、コンバウン朝の工芸の粋と言われる数多くの彫刻がびっしりとあつたという。現在訪れると、その金箔もはげおちて、もろに木肌を表わしており、その、人を形どった彫刻もかなりはざされてい。観光客に高く売るために一つ二つとはずされていったという。そのはずされた跡には、ただ釘の穴が残っているばかりである。ガイドさんも、この前に来た時はもつとあつたのにと憤慨している様子もなく言っている。管理して守る人がいなくなれば朽ち果てるのは仕方

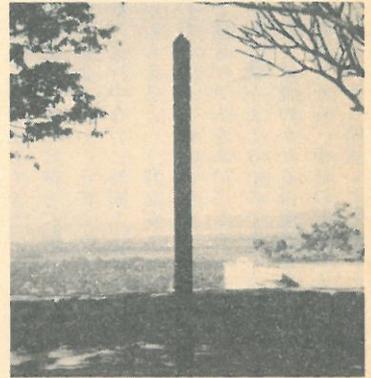
観光地的要素を持つのは味気ない気もするが。

階段の途中では何か所かコンコースの様な所があり、高さが十メートル余りの黄金に輝く釈迦立像があつたり、仏像、仏足石が置いてあつたりして、参詣者が熱心に祈っている。ここは頂上のパゴダを中心に全体が一つの巨大なパゴダになっているという。頂上で展開する景色には、目を見はった。眼下には正方形の外濠で囲まれた王城、また今まで登ってきた階段の屋根が山腹にくねくねと続き、そのかなたには緑に囲まれたマンダレーの街が見え、ところどころに白いパゴダや僧院が点在している。また視線を変えると赤茶けた大地の地平線の延長上には紺青の空と境を接するかのような山の脈が続く。やはり大陸はどこか日本と違って壮大さがある。日本の箱庭的風景に見慣れているだけに感激は大きかった。



マンダレーヒルの石段の屋根

頂上にあつた慰霊碑



頂上付近の木陰にひっそりと旧日本軍の英霊を祭る慰霊碑が一本あつた。そこに墨で書かれた文字は消えかかっていた。読めなかったが、神妙な気分になつた。日本から来た慰霊団が後方の絶景を目のあたりにして心ひかれるものがあり建てていったのであろう。忘れかかっていたものが呼び起こされたような気がした。

昼食をホテルで摂り、休む間もなく次に象牙細工の工房へ行く。いろいろなもの売られており、土産を買いこむ。私はこの工房の前の道に出ればらく眺めていた。車はほとんど走っておらずポカポカとポニーカが人を乗せてのんびりと走っている。のどかな昼さがりで皆のんびりと歩いている。貧乏性の私はなんと暇の人が多いいんだろうと思つてしまう。この国ではおそらく極悪な犯罪などおこりようがないのではないかと思える。これもやはり仏教の影響による心の穏かさ

のためなのか。我々の眼から見ると最低限の生活に満足し無気力のように思える場合もあるが、これは皮相な考えであるようだ。ビルマはアジアにおいて文盲率の低い国であり、また教育も、昔ながらの寺小屋式の学校も地方に多くあるという。この現実の生活に満足し、必要以上の物や金に執着しないという事が、急激な近代化を防いでいるのだ。しかしこのままでは決して良いとは思えない。昔ながらのロンジーとか袈裟は決して活動的なものではないし、現実の障害を積極的に乗り越えていこうという意志もないように感じられる。昔からの生活に満足し、自然と溶けあつて暮らし、世界をそのままにとらえるだけで決して反抗してつくりあげていこうという意志はないのであろうか。私は、人間の力は有限であり、自分より以上のものに救つてもらおうとへりくだつて生活しているだけでは生きていく意味がないと思う。そこが仏教に対する疑問である。

しかし近代化にも疑問がある。ただ単に効率化をめざし、よりよい生活、収入を求めてあくせくと働き、競争心のみありたてる。近代化は人々を物質的な貧しさから解放したが、精神的にはそれについていけないという矛盾も生みだした。また一部に人間は人間以上のものであるような錯覚も生みだした。しかしこの特殊な時期である近代化を過ぎて、物質的な貧しさから脱けて、次に人間が必要

とするものは、近代化以前に自分らもついていた友情とか愛情とか、また裸の人間の価値というものである。己に立ち返つて人間を見つめるといふ事の大切さを知るのである。そこで、高度に管理化された産業社会においてこそ宗教と人間という関わり合いが見直されるのではないかと思う。人間の思いあがりを防ぐ意味においてである。

バスはイラワジ川にかけられているサガイン鉄橋に着いた。この橋の入口には警備兵が居て機関銃を構えて、鉄橋を写真に撮つてはいけないと言ふ。交通の重要な拠点なのである。ここから眺めた対岸のサガイン・ヒルはすばらしかった。山腹の緑の中に白い僧院がたくさん見えている。仏教国ではしばしばみられる山岳仏教といわれる仏教修行のための数百に及ぶ僧院である。藍色の空と緑の山、白い僧院、淡い青色を呈すイラワジ川、そ



機関銃を持った警備兵

これらのコントラストはみごとであった。

またしばらくバスに揺られてサガイン・ヒルの一面にあるサーウンボンニヤシー・パゴダに着いた。例の如く素足になり、マンダレー・ヒルに劣らぬ階段を登る。この日は朝早くラングーンを出てきて駆け足で見回っているのだ、ここを登った時にはかなりばてていた。この階段の途中に、よく血を吐いたような跡があった。これは僧侶が盛んに嘔んでいるキンマと呼ばれるもので、ビンロウ樹などが含まれているそうだ。これを嘔むと気持ちが良いくなるそうで、独特の苦みと芳香があり、唾液と混じって血のような色になり、そして口のなかにたまった唾液を吐くのだそうだ。しかし、あまり見た目には気持ちが良いくない。

この頂上にもやはり、すばらしい、きらびやかなパゴダがあった。そのすぐ裏手のところに、そのパゴダと対照をなす、白無垢の二―三十メートルくらいのパゴダがひっそりと建っていた。これは第二次大戦中、ビルマ戦線で亡くなった日本兵の霊を弔らうために三―四年前に日本の慰霊団の方が努力して建てたもので、日本パゴダと呼ばれている。パゴダの基壇の部分には、びっしりと戦没者の名前が刻まれている。ここを守っている下さるお坊さんは日本へも行った事があると、私達に日本語で説法して下さった。私達は奉賀帳にこの今の複雑な感慨を記した。この奉賀帳はもうかなり厚

サガインヒル頂上のパゴダ

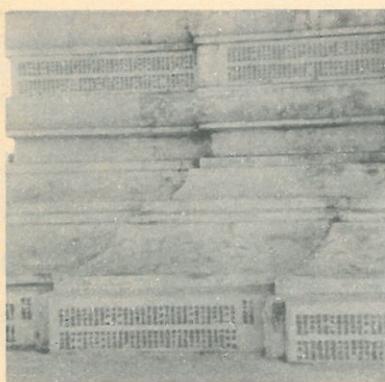


くなっており、多数の慰霊団の方が参詣した事になる。マンダレーに来てからは、青く澄み渡る空とパゴダなど、絶景を呈する所が多いが、やはりこれも例にもれず、日本パゴダより望む眼下の三六〇度パノラマは、今までの中で一番美しかった。緑の森が続き、夕焼けの空に夕餉の煙がたちのぼっていく。はるか彼方のイラワジ河にかかる、アバの鉄橋が見えるだけで、あとはジャングルが広がっている。このジャングルの中にはまだまだ供養されないままに眠っている英霊があると思うと、手を合わせずにはいられなかった。三十数年前に英印軍に追われ、昼はジャングルに潜み、夜に敗走した日本軍。その中には数多くの我々と同じ年代の人達がいた事であろう。この日本からジェット機でも約十時間かかる遠い異郷の地で祖国のためにと散っていった人達はさぞかし無念であった事だろう。この

人達の犠牲があつてこそ今の日本、私達があると思うと、戦争を知らないとはいへ胸が痛む気がする。そんな戦争を二度とおこしてはならないという決意を心に刻み日本パゴダを後にした。

ユニークなカムロ・パゴダ

すでに暗くなり、夜の帳が降りる頃バスはカムロ・パゴダに着いた。このパゴダはちよび半球をふせた形をしており、その形から別名、オツパイ・パゴダとも呼ばれている。ガイドさんの説明では昔の王様がかって愛した後の胸を忘れられずに建てさせたとか。その真偽はともかく仮にもパゴダともあろうべきものが不謹慎だと思う。しかしなんとよく似ていてユーモラスである。この内部にはセイロンから伝わった仏歯を納めてあると言う。



日本人パゴダに刻まれた戦没者名

マンダレーに向かうバスの中で私達は、今日の疲れを吹き飛ばすかのように歌を歌った。真暗なジャングルに囲まれた、外灯などついていない道をバスは大きく揺れながら走った。黒いジャングルは無気味であった。村を通っても細々とした電灯がともっているだけである。マンダレーの街もほとんど陰翳に包まれているのである。ネオンに輝く日本の夜の盛り場を思うと、ここはなんと淋しいところかと思うが、不敬な私でも当地に二―三年も居れば謙虚に夜の闇を怖れ、熱心な仏教徒に帰依できるのではないかと気がした。

外国製もあるゼー

ホテルで夕食を摂った後、今度は夜のゼー（バザール）に行く。九時頃なのですでに店閉まいをしているところが多かったが、それでも結構いろいろな物が売られていた。外国製のウイスキーや電気製品も割高ではあるが売られている。ロンドンゼーを売っている店に行き、いろいろ物色していると、私達の回りには多くの人達がとりかこむようにして集まってきた。そのなかに幼い子を抱き、小さい子の手をひいて、こちらに手をさしだしてくる女の人がいた。その手が一つや二つなら良いが、どつと来たのには参ってしまった。しかしカメラを向けたらどうい

う訳かそそくさと立ち去ってしまったのでなんとなく変な気がした。

ゼーから近くの寺院のお祭りの夜店に行く。ここは賑やかである。夜の楽しみはビルマの人にとってはゼーやお祭りの夜店なのであろう。特に、野天の即席の舞台でなにかしらの劇をやっている所はたくさんの人が集まっている。千人くらいの方が舞台を見て、笑っている。それは何か男女の恋をテーマにしているのであらうか、遠くから眺めていてもビカピカの衣装を着て、舞台狭しと動き回っているのが見える。すでに十時をすぎ、今にも降つてきそうな満天の星空から来る澄んだ空気にあたっていると底冷えがする。暗黒のベールに包まれてしまい、夜の静寂があたりを支配する中に身をまかすという事は、自分を謙虚に見つめ、また仏陀の教えが自然と自分の精神に語りかけてくる大切な時間なのであろう。公害もなく夜空の星のシーイングを遮るものもない所にいと妙に感傷的な気分になつてしまつた。

マンダレー・パレス

ラングーンのレストラン・ホテルでは部屋が広すぎて、また蚊がいたため寝不足であったが、今日は、あわただしく見て回つたのも加えて、この夜は落ち着いてぐっすり眠る事ができた。おかげで次の日は実に爽快な朝を向かえた。この

日はまず最初にホテルのすぐ前に、ずっと一直線になつている外濠を渡つて、マンダレー・パレスに行く。ここはビルマ王朝終焉の地であり、昔の王城の跡である。外濠の内側に走る高さ八メートルあまりの煉瓦で築かれた城壁が完全な正方形の形をして王城をぐるりと囲んでいる。また独特の彫刻装飾を持つ城門が静かに濠の青い水面に映る姿は、この王城、ビルマという国の歴史を考えさせる魅力が秘めている。ラングーンに帰る飛行機の席の予約が昼頃のものしかとれなかつたという事で、ここは足早に通り返した。もつとじつくりと歩き回つて見たいというのが本音である。しかし滞在日数が限られていたので全て皮相な見学に終わつており、この国に対して皮相な考え方を持つよう恐ろしい。しかし興味をもつというきっかけがつかめた事は良かったと思う。国際感覚に乏しいと言われてい

る日本である私にとつて、このきつかけこそがこれからの成長につながる大切なものだと思う。

次に民族衣装を作っている店の前にバスは止まつた。私達のメンバーの女性がその衣装をかりて着て、店先でポーズをとつて写真を撮つていると、やはり付近の人々が集まつてきて、もの珍しそうに眺めている。また通りを隔てたところには消防自動車らしい大きな車が止まつていて、その上に消防士らしき人が二十人くらいでこちらを眺めている。その前を

のんびりとポニーカがパツカパツカと通り過ぎて行く様子はこの街の性格が表われていると思つた。この店の前には天秤棒に鍋をつけたおじさんがモヒンガを売つており、二人の少女が道にしゃがみこんで食べている。これはビルマ独特の麺類の一種で、短くブツ切りにした米粉製



モヒンガを食べる筆者

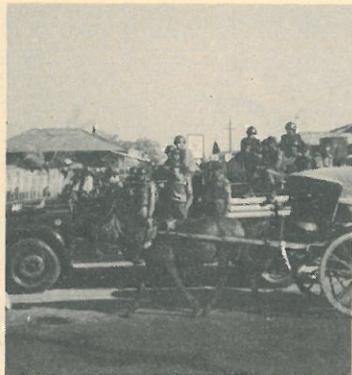
の麺の上に独特のスープとかいろいろものをふりかけてあるものである。彼女達が湯気をたてながらおいしそうに食べているので、つい買い求め食べてみる。食器もうす汚れ、前の人が使つたのをさつと水に通す程度で不衛生だという気もしたが、あまり気にはしない方なので一緒に地面にしゃがみこんで食べた。タイにしてもそうだが、どうもこちらの食べ物には香辛料の独特の臭いが強烈に効いていて、辛いのである。暑い気候のところでは、そうでもしなければ食欲が湧かないのかもしれないが、このモヒンガもやはり辛かつた。

賑やかなマハミヤムニ・パゴダ

マンダレーでの最後の見学地は、空港に向かう道の途中にあるマハミヤムニ・パゴダであった。マンダレーで見たパゴダの中では一番賑やかで活気があつた。本堂に通じる通路にはびっしりと、象牙細工、織物、竹細工などのお土産を売つており、なかなか彼らは商売上手だ。

本堂には十メートルくらいの大仏が安置されており、その表面は信者によって貼られた金箔が幾重にも重なつてごわごわとしている。参詣者が熱心にお祈りをしていて、女性はある線より前には行けないので、男性の後方で膝を折り、額を床につけるようにして拝んでいる。その参詣者達の間をぬつて黄金に輝く大仏の

消防車の前をポニーカがのんびりと通り過ぎる



台座まで寄ると、僧侶達がやはり熱心にお経を唱えている。一体、何を熱心にお祈りしているのか知る由もないが、心から信じるものをもつ人達の真摯な態度には心が惹かれた。

日本に例えれば京都のようなこのマンガレーの静かな街にもやがて近代化の波がきつとおし寄せてくる事だろう。しかしそれに呑みこまれる事なく、人間尊重の精神を忘れる事なく、より一層に美しくなっていくことを願ってラングーンへと飛びたった。

若い夫婦と隣席

ラングーンへの機内で隣席した人は、大きなバックパックを持ったスイス人の若い夫婦であった。彼らは七月にスイスを発ち、あちらこちらとYMCAなどに宿まり歩いていると言っていた。いつ帰るのかと問うと分らないと言う。これからタイ、フィリピン、マレーシアなどを回るといふ。それこそ彼らは一銭の金も無駄にする事なく、いろいろな国を見て歩いているのである。バイタリティがある。美しい風景を見て、その土地の人々との触れ合いを大切にして旅をする。日本人ほど旅をしたいと言いが、旅を

しない国民はないのではないか。これからの時代は今より一層、他の国々との密接な関係が要求されると思う。島国であるから、大きな海にまわりを囲まれてい

るから、という事が国際交流の邪魔になるはずがない。とにかく若いうちに外国へ出て国際感覚を養うべきである。余計な物を持たないで旅をし、本当の自分自身を求め、また自分をさらけ出して相手との親密さを深める、そんな旅をしたい。

そういう旅をして体験を積み、日本が「アジア代表」などという大上段にふりかぶった意識を持つこともなくなるのではないか。宗教と企業活動という根の深い問題に対しても、もっと理解ある解決の仕方が生みだされる事であろう。ヒモつき援助などという自国本位の儲け主義もなくするであろう。無資源国日本の立場から発する政策、政府のコントロールを打ち破る程、強力な商社、メーカーなどの企業にこそ真の民主外交の自覚を求めたいと思う。

むし暑いラングーン市内に入り、シユエダゴン・パゴダの威容が目に入った時は、ホッと息をついた。もう明日の今頃はバンコクに居るのだと思うと、もっとじっくりと見たかったと思う気持ちと、もっと勉強してやるのだったという気持ちで虚しかった。ビルマでの最後の夜はマンガレーから帰るのを待ちかねるようにしてホテルに訪ねて来てくれた外語学院の学生達と、市内のバンブー・レストランという所で食事をした。ここは建物物が全部竹でできているすばらしいレストランであった。彼らとの会話において

もどまも言葉の壁は厚かったし、また政治、社会、思想上の話題を避けていたため将来のビルマの中で重要な位置を占めるであろう彼ら、彼女らから深い考えを聞く事ができなかった。残念である。しかし彼ら、彼女ら一人一人は皆、明るく、誇りと自信に満ちて落ち着いた表情をしている。今でもパゴダの中の仏像の穏やかな顔と彼ら、彼女らの顔が重なって思い浮かぶのは偶然であろうか。

いよいよ帰国の日

いよいよ帰国の日の朝が来た。あしかけ四日の訪問ではあったが、生まれて初めての異郷の地で、数多くの経験ができた興奮とともに、なんとなく心が安まる思いに満足しきった感じである。これがビルマではなく他の国だったら、こうはいかなかったのではないかと思う。外語学院の学生がこの日は朝の七時から来てくれて、動物園に案内してくれた。かなり大きな動物園であった。冬だということに赤い花が咲き乱れ、夜があげきったばかりの園内は動物の鳴き声も聞こえずシーンと静まりかえっている。厳格な仏教徒の国ビルマにおいてもやはり、動物にとつては受難に満ちた動物園があったのである。

動物園を出て、首都ラングーンにおいて、百貨店のな意味をもつバザールに行く。私達の行ったボージュ・ゼーは広大

な建物であり、その中には所狭しとばかりに、宝石商、象牙細工商、金物、雑貨、衣料品店などがグルーブを作っている。その賑やかな様子を見ていると、この国が物資が乏しいなどとは信じられない。しかし地方へ行くと、全ての物資が不足していると言う。これらの問題を着実に解決してビルマの社会主義が前向きに進んで行く事を心から期待している。

私達は遅い朝食をゼーの近くの中華料理店で摂り、一旦ホテルに戻ってから空港へと向かった。バスはラングーンの日抜き道路を走る。スレー・パゴダ、シユエダゴン・パゴダの黄金に輝く巨体が青く澄みわたった南国の青空にそそりたっている。この国はこれらのパゴダがある限り、仏教とともに進んで行く事だろう。近代化の良い面をどんどん取り入れてゆつくりと着実に国づくりを進めて欲しい。私のこれからの一生に、本当に貴重なビルマでの体験は、改めて人間の何たるかを考えさせてくれたのであった。

いつの日かビルマに

そんな思いを胸に抱きながら、いろいろと最後まで親切にしてくれた上に、たくさんのお土産までくださった外語学院の学生達との別れを惜しみながら飛行機に乗り込んだ。またいつの日かビルマを訪れる日の来る事を願いつつ……。